



Title	人間存在の気分と言葉：言葉の根源へ向かうハイデガーの視線
Author(s)	佐々木, 正寿
Citation	メタフュシカ. 2004, 35, p. 61-74
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/12532">https://doi.org/10.18910/12532</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 人間存在の気分と言葉 — 言葉の根源へ向かうハイデガーの視線 —

佐々木正寿

### はじめに

詩人大岡信は、言葉と人間の関わり方について次のような見解を示している。

「自分が言葉を所有している、と考えるから、われわれは言葉から締め出されてしまうのだ。そうではなくて、人間は言葉に所有されているのだと考えた方が、事態に忠実な、現実的な考え方なのである。人間は、常住言葉によって所有されているからこそ、事物を見てただちに何ごとかを感じることができるのだ。」(『現代芸術の言葉』(1967年)「あとがき」)

人間が主体として言葉を使いこなしていると考える者にとって、〈言葉が人間を持っている〉という捉え方は、まさに意表をつくものであろう。しかし大岡によれば、このように考えたほうが人間の実情をよりよく理解することができるというのである。これは、或る意味で絶えず言葉と格闘している詩人なればこそその発見かもしれない。ところが、このような〈人間が言葉を持っているのではなくて、言葉が人間を持っている〉という洞察を私たちはまた、すでにハイデガーの思索のうちに見出すことができる。彼は、奇しくも詩人ヘルダーリンの詩作についての講義のなかで、こう述べているのである。

「言葉は、人間が他の能力や道具とともに持っているものではなくて、人間を持ち、然々の仕方でその現存在そのものを根本から接合し規定するものである。」(GA39, 67)

詩人としての大岡の見解とヘルダーリンの詩作の解釈にもとづくハイデガーの思索が、はからずも一致して示している〈言葉が人間を持っている〉という洞察は、言葉と人間とのいかなる関係を捉えているのであろうか。かつてアリストテレスが、動物や植物と比べて人間に固有の

能力を「ロゴスの働き」に認めて、人間を「ロゴスを持つてゐる動物」<sup>1</sup>と規定して以来、概ね私たちは、人間は言語能力を持ち、言葉を使いこなしているのだと考えてきたと思われる。このような考え方したがえば、言葉は人間の所有物・道具であり、人間は言葉を使用する主体なのである。大岡とハイデガーの洞察は、このような人間中心主義的な立場に反省を促すものとして受け取ることもできるであろう。そしてそのとき、言葉と人間存在との関わりをめぐる新たな問題圏が開かれるのだといつてもよい。

そこで本論文では、まずハイデガーによる人間的現存在の現象学的探究のうちに、言葉のあり方や根源についての解釈を確認し、次いで詩作をめぐる哲学的探究のなかに、言葉の本質に対するハイデガー独自の洞察を捉えることによって、言葉のあり方や根源、本質に対する彼の新たな視線——従来の視線の転換——を見出す。そしてさらに、ハイデガーにみられる〈詩作の言葉〉のほうから言葉の本質を捉えようとする立場が、人間存在の直接的な〈生の言葉〉を聞き取る立場として、いわば自己疎外の窮境にある現代の人間にとってひとつの積極的な実存的意義を持っているということを示したい。

## 1 人間の存在と気分の現象

### 1-1 「事実的な生」と気分

初期フライブルク時代の諸講義においてハイデガーは、ディルタイの「生の哲学」から受け継いだ「生」に対する問題意識のもとで、フッサールの現象学を哲学的探究の方法的態度とすることによって、人間の「事実的な生」のあり方を現象学的に解釈することを試みた。そのような探究をハイデガー自身は、「生の根源学」あるいは「事実性の解釈学」として性格づけている<sup>2</sup>。こうした現象学的探究をつうじて、「生」の問題圏のうちに表明的に見出されたのは、生の事実的なあり方としての「事実性」という事象領域である。そしてハイデガーは、この「事実性」の問題領域において、ひとつの特徴的な事態を明らかにした。それは、事実的な生が「世界の内に在ること」は「世界の内で気分づけられること」にほかならないということ、換言すれば、事実的な生においてそれ自身の存在が第一次的に「気分」という現象をつうじて見出されているという事態である。例えば 1919/20 年冬学期講義『現象学の根本諸問題』のなかで彼は、生と世界との出会い方を次のように捉えている。

「このような周囲世界、共同世界、自己世界、(一般に周囲世界) の内で私たちは生きている。私たちの生は私たちの世界である。——そして、私たちは[世界に]眼を向けることはめったになくて、つねに、たとえまったく目立たず隠されていても、私たちはそこに『居合わせている』のである。すなわちそれは、『とらわれて』、『不快感を覚えて』、『楽しんで』、『あきらめて』という仕方においてである。『私たちはつねに何らかの仕方で[世界に]出会いわれている』。」(GA58, 33f.) ([ ]内は引用者による補足。)

<sup>1</sup> アリストテレス、『政治学』、第 1 卷、第 2 章ほか。

<sup>2</sup> Vgl. M. Heidegger, GA58, S. 81; GA63, S. 7 u. S. 14ff.

ここで示されているのは、日常において私たちは世界を世界として対象化して見ているのではなくて、そのつど或る特定の仕方で世界のもとに居合わせているということであり、しかもその出会い方は、けっして際立ったものではなくて、いわばなんらかの「気分」的なあり方をつうじてのものだということである。このことは換言すると、私たちが「世界の内に在る」ということは「世界の内で気分づけられている」ということにはかならない、ということだといつてよい。あるいはまた、1920/21年冬学期講義『宗教の現象学への入門』では、「私」の自己の経験について次のように述べられている。

「私は事実的な生の内で自分自身を、……私が果たしたり被ったりするもの、つまり私に出会いわれるものにおいて、また、憂鬱状態や高揚状態などの私の諸状態において経験する。私自身は、けっして私の自己を目立った状態において経験するのではなくて、私はつねに周囲世界に、とらわれるような仕方で居合わせているのである。」

(GA60, 13) (……は引用者による省略)。

ここでもやはり、事実的な生において「私」は自己を、「気分」のうちで経験しているという洞察が示されているといつてよい。

このようにハイデガーは、事実的な生のあり方を現象学的に解釈することをつうじて、生と世界との出会い、あるいは生それ自身の自己の経験が、「気分」というあり方をとおして遂行されているということを見出した。しかもこのような気分は、ハイデガーの解釈にしたがえば、同時に事実的な生に特徴的な存在性格を露わにしている。彼は、例えば1921年夏学期講義『アウグスティヌスと新プラトン主義』のなかで、アウグスティヌスにおける「モレスティア(molestia)」の経験を解釈して、生が事実的な「自分自身を持つこと」にもとづくものであるかぎり、それは「辛い」という気分をつうじて理解されるということを指摘している<sup>3</sup>。また、同じくアウグスティヌス解釈にもとづいて彼は、事実的な生の遂行意味として理解される「テンタチオ(tentatio)」を可能性の経験として捉え、この可能性が私たちには「重荷(Last)」として受け取られるということを示している<sup>4</sup>。

こうして「気分」は、事実的な生と世界との出会い方、あるいは事実的な生の存在とその存在性格を第一次的・直接的に開示する現象として——それゆえ「事実的な生」に関する現象学の第一次的な所与として——理解される。こうした理解を私たちは、「気分」という現象の哲学的意味の発見として認めることができる。

## 1-2 パトスの現象

ハイデガーはまた1924年夏学期講義『アリストテレス哲学の根本諸概念』のなかで、アリストテレス哲学におけるパトス概念の解釈をつうじて、人間的現存在の存在と気分との根本的な

<sup>3</sup> Vgl. M. Heidegger, GA60, S. 243.

<sup>4</sup> Vgl. ebd., S. 248f.

関わりについて主題的に述べている。この講義において彼は、「パトス」——“Befindlichkeit”(情態) という訳語を充てている——をアリストテレス哲学の根本概念のひとつとして位置づけ、パトスの現象そのものへと遡及しつつ、パトス概念の解釈を試みているのである。その際ハイデガーは、とりわけアリストテレスの『弁論術』における探究を「現存在の解釈学」として理解し、そこで示された諸解釈を人間的現存在の現象学的分析論という自らの問題圏のうちに取り入れて考察している。

「パトス」という概念によって捉えられている現象それ自体は、ハイデガーの解釈にしたがえば、心的なるものの状態などではなく、「世界の内に生きるもの的情態」(GA18, 122)にほかならない。そしてそれは、人間的現存在の存在の仕方、つまり世界の内に存在するというあり方、他者と共に存在するというあり方の規定の基礎をなしている。

「問題になっているのは、『肉体的な随伴現象』をともなった『心的な状態』ではなくて、パトスは、人間全体を世界におけるその情態の点で性格づけているのである。」(GA18, 192)

つまり、パトスは、世界の内に存在する人間の存在全体の性格を表している基礎的な現象として理解されるのである。

しかもこのようなパトスは、身体をその質料としている。つまり、パトスの現象を共に構成している契機は、生というあり方、すなわち世界の内に存在するというあり方を具体的に可能にしているものとしての身体である。したがってパトスは、身体を持った人間存在全体——心身の統一態として——の現象として捉えられねばならない。

そして、このようなパトス(情態)は、人間的現存在が自らの世界-内-存在としての自己について知る仕方である。情態としての「ヘードネー(快)」についてハイデガーは、次のように述べている。

「世界-内-存在というものが私が同時に持っているような存在であるかぎり——この場合、『持っている』とは『それについて知っている』ということを表す表現である——、ヘードネーは世界-内-存在の基礎的な規定にほかならない。私が私の世界-内-存在について解明を持っている、つまり私が私の世界-内-存在持っているのは、ヘードネー、すなわち気分的に自己を見出すこと(Sichbefinden)においてである。私は同時に私の存在の規定、私の存在の仕方を持っている。」(GA18, 244)

このように「パトス」として捉えられる情態という現象は、世界-内-存在としての——しかも身体を持った——自己を知る基礎的なあり方として解釈されるのである。

### 1-3 現存在と情態

『存在と時間』においてハイデガーは、「存在の意味への問い合わせ」を表明的に哲学の根本の問い合わせとして位置づけ、この「存在の問い合わせ」を問い合わせとして仕上げることを目指している。このような

存在論の問題圏において彼は、人間的現存在の実存論的分析論を、存在論に基礎を与えるものとして捉え、それを「基礎的存在論」とよんだ。こうして、初期フライブルク時代の諸講義において展開された「事実的な生」の現象学的解釈は、現存在の現象学的分析論——「現存在の現象学」——として引き継がれ、存在論の一契機として遂行されるわけである。

ハイデガーは『存在と時間』において、現存在の根本体制を「世界-内-存在」として規定し、その「内-存在」という構造契機を現象学的に解釈している。その際彼は、現存在の「現(Da)」を「開示態(Erschlossenheit)」として理解しているが、これは、いわば事柄が露わになる場所的な性格を持ったあり方と考えてよい。このような開示態を構成している契機としてハイデガーは、「情態」と「理解(Verstehen)」、「語り(Rede)」という現象を挙げており、この「情態」とは、私たちが一般に「気分」ないし「感情」として知っている現象を指している<sup>5</sup>。この「情態(Befindlichkeit)」という概念には、初期フライブルク講義における探究のうちで見出されていた、「世界の内に在ること」は「世界の内で気分づけられていること」であるという解釈が含意されていると考えられる。そして、この用語にはもちろん、“sich befinden” という表現が「在る」という意味と同時に「然々の様態である」という意味で用いられるというドイツ語の語法が生かされている。こうして「気分」という現象は、現存在の分析論において、現存在の開示態を構成するひとつの契機として位置づけられるのである。

ハイデガーの分析にしたがえば、「現存在はそのつどすでにつねに気分づけられている」(SZ, 134)のであり、このような気分すなわち情態の本質的な性格として、三つの点が挙げられる<sup>6</sup>。第一に、情態は現存在を、その特定の世界へ委ねられているという「被投性(Geworfenheit)」において開示しており、しかもそれは、そのようなあり方を避けるという仕方においてである。つまり、現存在とは「現へと委ねられて在ること」であり、このようなあり方が「重荷」として気分のうちで経験されているのである。第二に、情態はそのつどすでに、世界-内-存在を全体として開示するものである。したがって、現存在の志向的な態度もまた、そのつど気分にもとづいている。第三に、情態は実存論的に現存在の世界開性(Weltoffenheit)を構成している。つまり、現存在にとって世界内部の存在者が出会われるということは、現存在に固有の「気分づけられる」というあり方にもとづいて可能になっているのである。——こうした解釈によれば、情態すなわち気分は、第一次的に現存在の固有の存在の仕方、つまり被投性を、とりわけ「重荷」として露わにするものであって、このような情態がつねに現存在のあり方を規定しているのである。



以上にみたようにハイデガーは、事実的な生ないし現存在のあり方を現象学的に解釈することをつうじて、この事実的な生ないし現存在の存在が「気分」の現象のうちに開示されているということ、そして同時にその固有の存在性格が——辛い、重いものとして——露わにされているということを明らかにした。しかもこの場合、そのような気分は、事実的な生ないし現存

<sup>5</sup> Vgl. M. Heidegger, SZ, S. 134.

<sup>6</sup> Vgl. M. Heidegger, SZ, S. 136ff.

在の存在・存在性格を、他の何よりも直接的に、つまり第一次的に開示しているのだといってよい。その意味で気分は、人間存在の根本現象として特徴づけられよう。このように考えてよいとすれば、気分という現象こそは、「生」の問題圏における現象学にとって、根本的な第一次的所与として理解されねばならない。

## 2 気分の現象と言葉

### 2-1 気分的理解の分節

『存在と時間』における現存在の現象学的分析にしたがえば、現存在の遂行する理解の働きは、つねに気分づけられている。つまり、現存在の理解は「情態的な理解」である。言い換えれば、理解はつねに気分（情態）をつうじて遂行されるのであり、このことは、現存在の気分という現象がそれ自体、理解のあり方にほかならないということを示している。しかも、先にみたように現存在の存在・存在性格が直接的・第一次的に気分のうちに開示されているのだとすれば、このような気分は、現存在それ自身の存在についての直接的・第一次的な理解——つまり、現存在の自己理解——のあり方として解釈されるであろう。こうした気分的理解は、いわゆる知的な理解というものではなく、生の遂行そのものをつうじての理解、つまりひとつの遂行知あるいは実存的理解であり、その意味で一種の直観的な自己理解であるといってよい。

もっとも、こうした直観的な気分的理解は、表明的な理解として仕上げられるためには、分節されて表明化（言語化）されねばならないはずである。それでは、こうした気分というあり方における実存的理解は、どのような仕方で表明的に——言葉へと——分節されるのであろうか。『存在と時間』における現存在の現象学的分析によると、情態的な理解の内容は、「解釈」に先立ってすでに、「語り(Rede)」という働きをつうじて分節される。ここでいわれる「語り」というのは、解釈や言明に先んじてその根底で働く分節化であって、この「語り」が外部へと言表されたものが言葉(Sprache)であるとみなされる。

「語りは、情態と理解と実存論的に等根源的である。理解内容(Verständlichkeit)はまた、わがものとする解釈に先立ってつねにすでに分節されている。語りは、理解内容の分節(Artikulation)である。したがってそれは、すでに解釈や言明の根底に存している。」(SZ, 161)  
「語りが外へと言表されたもの(Hinausgesprochenheit)が、言葉である。」(ebd.)

あるいは、次のように述べられている。

「世界-内-存在の情態的な理解内容は、語りとして言表される。この理解内容の意義全体が、語(Wort)になる。意義から語が生まれてくるのである。」(ebd.)

ここに示されているようにハイデガーは、言葉としての表明化に先立って情態的な理解内容を分節するあり方というものを認め、それを「語り」という実存論的概念で捉えている。つまり、

この「語り」というあり方は、世界-内-存在についての情態的な理解内容を、意義に即して分節するということである。直覚的な情態的理解の内容はこうして、「語り」という現存在の根源的な構成契機をつうじて分節され、それが外的に表明されるとき「言葉」となる。このようなハイデガーの解釈にしたがうかぎり、語り出された「言葉」というものはまさに、そのつどの現存在の情態（気分）の表明的なあり方にはかならない。つまり、人間の語る言葉は、そのつどの現存在の気分から生まれ出ているのである。その徵表となる、言葉の上の現象を私たちは、例えば抑揚や転調、話す速さなどとして知っている。

ハイデガーによる現存在の現象学的解釈にしたがって考えれば、人間の語る言葉の根源は、気分のうちに認められるといつてよい。しかもこの場合、そのような気分が人間的現存在の存在の直接的・第一次的な開示態であるとすれば、こうした気分から生まれ出る言葉というものは、人間存在の開示態の表明化にはかならず、まさに人間存在そのものにもとづく根源的な現象として理解されねばならない。

## 2-2 パトスとロゴス

気分（情態）と言葉との根本的なつながりをハイデガーは、すでに1924年夏学期講義のうちに、やはりアリストテレス哲学におけるパトス概念を解釈することをつうじて示している。

まずハイデガーの理解にしたがえば、そもそも「話す」ということは、相手に対して・相手と共に話すということとして「相互存在(Miteinandersein)」のあり方であり、その際、話し手の見解に対して聞き手がどのように判定するかを決定づけるという点で、話し手の「エーストス」と共に聞き手の「パトス」が重要な契機と見なされる<sup>7</sup>。

アリストテレス自身『弁論術』第2巻第1章において、他人の見解に対して私たちの下す判断がそのつどの気分によって左右されるということを指摘している。それゆえアリストテレスによれば、話し手は聞き手を納得させるように聞き手のパトスを導いてゆく必要があるのである。こうした点にもとづいてハイデガーは、次のように述べている。

「このように自制心を失うことにおいて共に襲われているのは、クリネイン、すなわち『区別すること』、『態度を決定すること』である。つまり、世界について、あるいは世界の内でわきまえている仕方というものが、このようにパトスによって襲われる場合には、共に要求されているのである。こうしたことによって、パトスとロゴスとの内的な連関が取り出されている——この場合ロゴスとは、クリネインの遂行の仕方としてのロゴスである。」  
(GA18, 248)

ここに示されているように、聞き手の判定、つまりロゴスは、必然的にパトスによって影響を受けるのであり、こうしたことから、パトス（情態）とロゴス（言葉）との根源的な連関が浮かび上がってくる。

さらにハイデガーは、いっそも表明的に気分と言葉との連関を指摘している。彼の分析によ

---

<sup>7</sup> Vgl. M. Heidegger, GA18, S. 161.

ると、日常性の領域のうちには、「人を話すことへともたらすような情態」として、「不安」と呼ばれる恐れの現象——その際、私たちは不気味に感じ、自分が何を恐れているのかわからない——が見出されるのである。

「私たちにとって不気味(unheimlich)であるとき、私たちは語り始める。これは、現存在にみられる話すことの発生、つまり、話すことが、不気味さによって性格づけられている現存在自身の根本規定とどのように関連しているかということ、このことに対するひとつの指示である。」(GA18, 261)

ハイデガーの解釈にしたがえば、不安の情態において不気味に感じ、何を恐れているのか自分でもわからないようなとき、人は話し始める。このことはまさに、不安という気分のうちで言葉が生まれてくるという事態を示している。しかもこの場合、不安における不気味さは根源的に、人間の現存在にとって根本的である事実的なあり方——被投性——による不気味さであり、その意味で不安という情態は、現存在の根本的な情態として特徴づけられる。つまりこの場合、現存在の根本情態のうちで、言葉が生じているのである。

たしかにアリストテレスは『弁論術』のなかで、弁論においてパトスの持つ意義を強調し、パトスとロゴスとの根本的な関連を示唆しているが、ハイデガーはよりいっそうラディカルに、ロゴスに対してパトスの持っている決定的な意義を際立たせ、現存在におけるパトスの実存論的な意味を明確にしているといってよい。彼は次のように述べている。

「パトスが心的な出来事の付属物であるばかりではなく、そこから話すことが生い立ち、そのうちへと言表されたものが再び生まれてゆくような地盤であるかぎり、パトスそれ自身は、現存在が自分自身を第一次的にわきまえる、すなわち自己を気分的に見出す根本可能性である。現存在の世界における存在を第一次的にわきまえていること、明らかにすることは、知的に知ること(Wissen)ではなく、気分的に自己を見出すこと(Sichbefinden)であり、これはそのつど存在者の現存在の仕方に応じてさまざまに規定されうるのである。」(GA18, 262)

ここで明確に示されているようにハイデガーは、パトスをロゴスの生い立つ根源的な地盤として捉えている。つまり、ロゴスはパトスから生まれ出て、またそのうちへと到達するというのである。このことは具体的には、人が気分にもとづいて話し、そしてその言葉が自分や相手の気分へと働きかけてゆくという事態を指し示していると考えてよいだろう。そして、このようにパトスがロゴスの根源的な地盤として認められるからこそ、そのようなパトスは現存在の第一次的な自己理解の仕方として解釈されるのである。

こうして私たちは、ハイデガーによるアリストテレスのパトス概念の解釈にしたがって、パトスとしての情態、すなわち気分が現存在の存在を第一次的に開示するものであること、そし

て、そのような気分からロゴスとしての言葉が生まれてくるということを、理解することができる。

### 3 言葉と詩作

#### 3-1 言葉の根源としての詩作

なるほどハイデガーは『存在と時間』のなかで、「情態の実存論的諸可能態の伝達、つまり実存の開示は、『詩作する』語りの独自の目標となりうる」(SZ, 162)と述べており、さまざまな気分を言葉として伝えることが詩作の目指すことであるということを認めている。そのかぎりでは、現存在の存在が気分のうちに開示され、そのような気分から言葉が生じており、この言葉が詩作を構成している、ということになるであろう。

ところが1930年代以降ハイデガーは、こうした言葉と詩作との関係をいわば逆転させた洞察を示している。つまり彼は、むしろ言葉の根源ないし本質を詩作のうちに見出しているのである。一連のヘルダーリン講義に先立って、すでに1931年夏学期講義『アリストテレス、「形而上学」第9巻第1-3章。力の本質と現実性について』のなかで、彼は次のように述べている。

「言葉の力のうちに在ること——、この場合、言葉とはもちろん言明や伝達の手段としてあるばかりではない。なるほど言葉はまたそのようなものもある。しかしそればかりではなくて言葉は、世界の明らかさと情報がそもそも出現し存在するところである。したがって言葉は、根源的に本来的に詩作のうちにある。この詩作というのももちろん、著述家の生業として受け取られるべきものではなくて、言葉は、神の呼びかけ(Anruf)に対する世界からの叫び(Ausruf)としての詩作のうちにあるのである。」(GA33, 128f.)

ハイデガーの所論によれば、言葉とは本来、世界が明らかにされ知らされる場であり、このように理解されるかぎり、言葉の根源は本来、「世界からの叫び」としての詩作のうちに求められる。

こうした詩作の問題は、つとに知られているように、一連のヘルダーリン講義・講演のなかで主題的に論じられている。例えば1934/35年冬学期講義『ヘルダーリンの讃歌《ゲルマーニエン》と《ライン》』では、「言葉の最も純粋な本質は、原初的に詩作のうちに展開される。詩作は、民族の原言語(Ursprache)である」(GA39, 64)と述べられており、言葉の本質が表明的に詩作のうちに求められている。ヘルダーリンの詩作を哲学の問題圏において解釈することをうじてハイデガーは、原初において言葉の本質が詩作のうちに存しているということを捉えた。そして彼によると、日常的な言語使用から出発する言語哲学はむしろ詩作を例外と見なしており、その点で本末転倒しているのである。ハイデガーはまた、とくにヘルダーリンの詩作を問題にする場合、「民族」という観点を表明的に持ち出しているが、このような立場のもとで詩作は、「民族の原言語」として特徴づけられている。

このように言葉の本質をむしろ詩作のほうから理解しようとする立場をハイデガーは、講演

『ヘルダーリンと詩作の本質』(1936年)のなかで明確に示した。

「詩作は、存在とすべての事物の本質とを建立して名づけること(das stiftende Nennen)である——それは、任意の言うこと(Sagen)ではなくて、私たちがやがて日常語のうちで語り扱うものすべてをはじめて開かれたもののうちへと入らせるものである。したがって詩作は、けっして言葉を眼前にある素材として受け取るのではなくて、詩作自身がはじめて言葉を可能にするのである。詩作は、歴史的な民族の原言語である。それゆえに、逆に言葉の本質が詩作の本質から理解されなければならない。」(GA4, 43)

ここに示されているように、ハイデガーの所論にしたがえば、詩作は原初的に日常言語以前の次元において、存在の出来事を「存在」と名づけ、あらゆる事物を「存在者」として明らかにして、こうした「事物」として存在させる。このような解釈にしたがうかぎり、原初的・根源的に詩作によってはじめて言葉が民族本来の「言葉」として可能になっているのである。こうした事情にもとづいて、むしろ「言葉の本質」が「詩作の本質」のほうから理解されなければならない。

### 3-2 言葉と人間の存在

こうしてハイデガーの解釈のもとで詩作は、言葉の原初的・根源的なあり方として捉えられている。そして、そのような詩作が日常言語に先立って、あらゆる事物を存在者として明らかにし、そして事物として存在させるのだとすれば、事物と関わりあう人間の現存在もまた、根源的には詩作にもとづいて可能であると見なされよう。こうした詩作は、卓越した「言葉の出来事」にはかならない。

「詩作それ自体はただ、その力のうちに人間が歴史的なものとして立っている言葉の出来事のうちで、卓越した生起である。詩的なものは、歴史的な現存在の根本接合(Grundgefüge)であり、このことはいまや、言葉そのものが人間の歴史的な存在の根源的な本質をなしているということを意味する。……人間の存在の根源的な本質は、言葉それ自体である。詩作と言葉は、二つのものではなくて、これらは共に歴史的な存在の同じ根本接合である。」(GA39, 67f.) (……は引用者による省略)。

詩作、したがって言葉は、人間の歴史的な現存在を根本的に構成しているものである。それゆえ私たちは、言葉そのものを人間の歴史的な存在の根源的な本質として捉えることができる。つまり、根源的にみれば、言葉によって人間は歴史的に存在することができるのである。

ところでハイデガーは、ヘルダーリンの詩『ゲルマーニエン』の解釈にもとづいて、「私たちはひとつの対話(Gespräch)である」(GA39, 69)と述べており、人間の存在は「対話」として生起するという洞察を示している。彼の解釈によれば、「対話」のうちで言葉が生起し、この生起が本来的に言葉の存在である。つまり、言葉の生起する原初的な対話が詩作にほかならず、この

ような詩作という対話のうちに、人間の歴史的な現存在はその根拠を持っているのである。

こうしたハイデガーの解釈にしたがえば、人間は、言葉の生起する「対話」として存在することによって、「存在者」として明らかにされている存在者のうちへと晒し出され(ausgesetzt)、そのことによって存在者の「存在」そのものに出会っている。というのも、すでに示されたように詩作、したがって言葉は、存在の出来事を「存在」と名づけ、事物を「存在者」として明らかにして、それを「事物」として存在させるものだからである。人間は、このような「存在者への晒し出し(Aussetzung)」を遂行するものとして、「歴史的」だと解釈される。その意味で言葉は、人間の歴史を可能にする根拠にほかならない<sup>8</sup>。

### 3-3 詩作の根本気分

すでに私たちはハイデガーによる現存在の現象学的解釈のうちに、現存在の存在が第一次的に気分現象のなかに開示されているということ、そして、そのような気分から言葉が発生してくるということを確認した。いまや詩作の哲学的解釈という問題圏では、言葉の根源は詩作のうちに求められているのであるが、先に見出された気分と言葉との根源的な連関はもはや認められ得ないのであろうか。

例えは1934/35年冬学期講義のなかでハイデガーは、「詩人は或る気分から語るのであり、この気分は、詩的に言うことが存在を建立する根底と地盤を規定し、その空間を一貫して気分づけている」(GA39, 79)と述べ、こうした気分を「詩作の根本気分」と名づけている。そして、この根本気分は、「詩的に言うことにおいて存在の刻印を受け取る世界を開く」(ebd.)のである。つまり、ハイデガーの解釈にしたがえば、詩人は、詩作——存在という出来事を「存在」と名づけるとともに、存在者の出会わる世界を開き示す——を根底から規定している「根本気分」から、言葉を発しているのである。そのかぎりで、言葉を原初的に可能にしている詩作は、それ自体根源的には、「気分」にもとづいているといってよい。このように詩作の哲学的解釈の問題圏においてもまた、気分と言葉との根源的な連関は認められるのである。

「詩作の根本気分」としてハイデガーが、例えはヘルダーリンの『ゲルマーニエン』から取り出すのは、「聖なる悲しみ(heilige Trauer)」である<sup>9</sup>。彼の解釈によれば、『ゲルマーニエン』に謳われている呼びかけの持つ痛み、嘆きは、「悲しみ」という根本気分から発現しており、しかもこの根本気分は、何ごとかに対する任意の悲しみではなく、「聖なる」悲しみである。そして、このような根本気分は、存在者全体、つまり世界を、本質的な仕方で開き示す。

「古き神々を呼ぶことを断念するのは、無しで済ませようとする決意である。……このような決意は、悲しみという根本気分の内的な優越から発現している。というのも、この悲しみは、すべての些細な多くの事物を無関心のうちへと押しやり、一なるものの触れ難さのうちにのみ留まるからである。……このような根源的な悲しみは、大いなる痛みの持つ端的な優しさの慧眼な卓越性(die *hellsichtige Überlegenheit der einfachen Güte eines*

<sup>8</sup> Vgl. M. Heidegger, GA39, S. 72-74.

<sup>9</sup> Vgl. ebd., S. 81ff.

*großen Schmerzes*)である——これが、根本気分である。それは、存在者全体を別様に、本質的な仕方で開く。ここでおそらく熟慮されねばならないのは、気分としての気分が存在者の明らかさを生じさせる、ということである。」(GA39, 82) (……は引用者による省略)。

「悲しみ」という根本気分は優越したものとして、その他の細々とした多くの事物をどうでもよいものとして押し退けてしまう。こうしてこの根本気分は、全体としての存在者、つまり世界を、これまでとは異なる仕方で、しかも本質的な仕方で開き示すのである。ハイデガーの所論にしたがうと私たちは、気分によって存在者を存在者として明らかに経験し、しかも根本気分をつうじて存在者全体を新たに本質的に経験するのである。

### 結語 — 詩作とパトスの「生の言葉」 —

ハイデガーによる人間的現存在の現象学的解釈にしたがえば、現存在の被投的な存在・存在性格は第一次的に気分の現象のうちに開示されており、そのような気分による現存在の自己理解が分節され外的に表明されて言葉となる。この点で私たちは、人間存在の開示態ないし現象化様態としての気分の分節化に、言葉の発生を認めることができる。その一方で1930年代以降のハイデガーにおける詩作の哲学的解釈によれば、言葉の根源は詩作のうちに求められ、そのような詩作は「民族の原言語」と特徴づけられる。ここに私たちは、言葉の本質をむしろ詩作の本質のほうから理解しようとする視線の転換を見出すことになる。このような立場から見れば、民族の根源的な言葉としての詩作によってはじめて、民族本来の言葉が可能となるのである。しかしハイデガーによれば、言葉を原初的に可能にする詩作は、それ自体根源的には「根本気分」から生まれるのであるから、言葉の生起はあくまで、人間的現存在の存在を第一次的に明らかにしている「気分」にもとづいているといってよい。このような意味で言葉とは根本的に、人間的現存在の存在の表明化様態にほかならない。

こうした理解に近い立場として、人間存在の開示態としての気分のうちに「言葉」を認めようとする解釈を、ミシェル・アンリの現象学のうちに見出すことができる<sup>10</sup>。彼によれば、生は「パトス」として現象化され、この現象化様態のうちで生は自己自身について語るのであり、その言葉が「生の語」——「生の言葉」——である。例えば、「苦悩」はひとつの語である。というのも、苦悩する肉体をつうじて、この苦悩が私たちに語るもの、つまり生が明らかにされるからである。アンリの理解にしたがえば、「生の言葉」としての「絵画の言葉」は、ハイデガーのいう詩人の言葉と同じである。ただし私たちは、ハイデガーとアンリとの違いを認めなければならない。すなわち、アンリのいう「生の語」は、生の現象化様態としてのパトスのうちで生が自己を直接的に〈語っている〉ものであり、これはハイデガーが問題にしている分節された言葉以前の次元に留まっているものだと考えなければならないのである。

〈言葉が人間を持っている〉——この洞察は、詩人大岡信と、ヘルダーリンの詩作を解釈し

<sup>10</sup> Vgl. Michel Henry, Pathos und Sprache, in: Ekkehard Blattmann, Susanne Granzer, Simone Hauke, Rolf Kühn (Hg.), *Sprache und Pathos. Zur Affektwirklichkeit als Grund des Wortes*, Freiburg/München 2001, S. 353ff.

たハイデガーが偶然に一致して、言葉を人間存在の本質として捉えたものであった。この洞察は、言葉こそが人間の存在を可能にして規定しているということ、つまり、人間は言葉のなかに生まれ、言葉のなかに生きているということを意味していると考えてよい。ハイデガーの理解にならえば、言葉によって私たちは、存在という出来事を「存在」と名づけ、したがって事物を「存在するもの（存在者）」として、そして「事物」そのものとして経験することができる。このような仕方で言葉によって私たちが存在者としての事物と関わりあう事態をハイデガーは、「存在者への晒し出し」として捉えたのであった。

しかも、ハイデガーの言語理解の立場においては、言葉は本来、原初的には詩作のうちに見出される。およそ言葉はそれぞれの民族に固有であり、そしてそれぞれの民族にはやはり固有の形式の詩歌が認められるように、根源的には詩作のうちにこそ民族本来の言葉が尖鋭化したかたちで生起していると考えることもできるのではなかろうか。詩人は根本気分から語るのだとすれば、その詩人の言葉は、アンリの言うような、パトスのうちに〈語られている〉はずの「生の語」を表明的に語っているにちがいない。したがって、詩作のうちに私たちは、歴史的な人間の「生の言葉」を聞くのである。「生の言葉」として絵画が、見えざるもの描き出すように、詩作の言葉は、およそ世人には聞こえない「生の語」を表明的に語っているのだといえる。それゆえ詩作は、人間の歴史的な現存在の原初的な解釈として、まさに〈ヘルメーネウエイン〉にほかならず、この世人には聞こえない「生の語」を私たちに〈伝える〉という行為であるといってよい。アンリの言うように現代の人間は自己から遠のいているのだとすれば、詩作をつうじてパトス——つまり、気分——のうちで〈語られている〉はずの「生の語」を聞き取ることは、本来の自己を取り戻すひとつの契機となることであろう。

**【文献】** 本文および注において、ハイデガーのテクストの引用ないし参照箇所は、次の略号のあとに頁数を併記して示している。

GA4: *Erläuterungen zu Hölderlins Dichtung*, Gesamtausgabe, Bd. 4, Frankfurt a. M. 1981.

GA18: *Grundbegriffe der aristotelischen Philosophie*, Gesamtausgabe, Bd. 18, Frankfurt a. M. 2002.

GA33: *Aristoteles, Metaphysik Θ 1-3. Von Wesen und Wirklichkeit der Kraft*, Gesamtausgabe, Bd. 33,  
2. Aufl., Frankfurt a. M. 1990.

GA39: *Hölderlins Hymnen >Germanien< und >Der Rhein<*, Gesamtausgabe, Bd. 39, 2. Aufl., Frankfurt a. M. 1989.

GA58: *Grundprobleme der Phänomenologie (1919/20)*, Gesamtausgabe, Bd. 58, Frankfurt a. M. 1993.

GA60: *Phänomenologie des religiösen Lebens*, Gesamtausgabe, Bd. 60, Frankfurt a. M. 1995.

GA63: *Ontologie (Hermeneutik der Faktizität)*, Gesamtausgabe, Bd. 63, 2. Aufl., Frankfurt a. M. 1995.

SZ: *Sein und Zeit*, 15. Aufl., Tübingen 1984.

(ささきまさとし 神戸女学院大学非常勤講師)

Stimmung und Sprache des Menschseins  
— Heideggers Sicht des Ursprungs der Sprache —  
Masatoshi SASAKI

In der heideggerschen phänomenologischen Hermeneutik des faktischen Lebens oder Daseins wird das Phänomen der Stimmung, d. h. der Befindlichkeit, als seine Erschlossenheit interpretiert. Die Stimmung selbst zeigt sich schon als eine primäre Weise der Selbstauslegung des Daseins. Auch in der heideggerschen Interpretation des aristotelischen Pathos-Begriffs lässt sich das Phänomen des Pathos als „Sichbefinden“ in der Welt zeigen. Phänomenologisch gesehen, ist das Sein des menschlichen Daseins primär in der Stimmung, d. h. in der Befindlichkeit, erschlossen.

Diese Erschlossenheit des Daseins, mit anderen Worten, die befindliche Verständlichkeit des Daseins, wird Heideggers Interpretation nach durch die „Rede“ artikuliert, und das Hinausgesprochene dieser Artikulation zeigt sich als Sprache. Den Ursprung der Sprache erkennt man daher in der Befindlichkeit (Stimmung). Ebenso wird in der heideggerschen Interpretation des aristotelischen Pathos-Begriffs das Pathos ursprünglich als der Boden für den Logos angesehen. Gemäß phänomenologisch - hermeneutischer Betrachtung wird der Ursprung der Sprache eigens in der Stimmung erkannt, in der das Sein des menschlichen Daseins primär erschlossen ist. Statt dessen findet Heidegger mit der philosophischen Interpretation der Dichtung den Ursprung der Sprache in der Dichtung selbst und versucht das Wesen der Sprache insbesondere aus deren Wesen zu verstehen. Seiner Meinung nach ermöglicht die Dichtung anfänglich die Sprache, die den Grund des geschichtlichen Daseins des Menschen ausmacht, denn mit der Sprache ist der Mensch inmitten des Seienden ausgesetzt und ist als Vollzug dieser Aussetzung geschichtlich. Trotz des heideggerschen Perspektivenwechsels kann man den Ursprung der Sprache anfänglich in der Stimmung sehen, weil der Dichter, Heideggers Interpretation zufolge, aus einer Grundstimmung spricht.

Von diesem Gedanken Heideggers ausgehend kann man von daher die das Sein des menschlichen Daseins primär offenbarenden Stimmung als Ursprung oder Boden der Sprache betrachten. Vor allem die Dichtung, die die Sprache eigentlich anfänglich ermöglicht, könnte sich als das Auslegen des „Wortes des Lebens“ (Henry), d. h. gerade als ihr „hermeneuein“, zeigen. In diesem Sinne dürfte man in der Dichtung als „Ursprache eines Volkes“ eine existenzielle Bedeutung erkennen.

「キーワード」

Heidegger, Hermeneutik, Stimmung, Befindlichkeit, Sprache  
ハイデガー、解釈学、気分、情態、言葉